

光と闇が静かに揺蕩う刻
冷たい水の香と陽の熱が指先に触れる

馴染んだ大地にふと目をあげれば
東に白き伝えを聞き
西に熱き熱風の後を聞く
永遠に波打つ大海が
その声を我らに伝える

朝に幼き声が
夜にことわりを告げる古き声が
我らを包む

路地からは
天下無敵の意を告げる老師の声が
角を曲がれば遠き西からの書を解く若い声が

古き人々を迎える楠の香り
榊の緑に祈る沈黙
しわの刻まれた手、白き服の人は、地に手を差し伸べ
敷き詰められたモザイクは、宙の音を祈りに添える

この地に流れる祝福を
我らは歩いてきた

高き白き山々
深く響く潮騒よ

今こそ我らに祝福を

とばりを開けて
訪れた方々を歓迎する機会を
我らに与えよ

両手を広げ
微笑みを浮かべる
その名誉の機会を我らに与えよ

豊かに流れる
我らを育み
我らを包んだ
その水と風と大地を光のままに
我らは誇らしく告げるだろう

その栄光を我らは歌う